

●自己紹介

まず自己紹介からはじめます。私は塩谷賢といいます。もともと数学をやっていたのですが、いまを去ること四半世紀前にいろいろ個人的な問題等々ありまして、大学院に行くときに私の師匠となるはずだった先生がやめてしまったんです。それからいま話題になっている厚生労働省に勤めまして、また大学院にはいりなおしました。そのときは、科学哲学という名前のところに入ったのですが、科学哲学をまったくやっておらず、ずるずるとここまで来ていると。それと、あっちこっちの学会に顔を出したり口を出しているのですが、論文は出さない、証拠が残るようなことを言わない、まともな形で哲学教育を受けたことがない。じつを言うと、私がここで授業をやるのがそもそも矛盾しているのではないだろうか。(笑) そろそろお前もいい年だから何か仕事を手伝ってくれということで、こちらの安藤さんに紹介されてついつい去年引き受けてしまい、ちょっと後悔している今日この頃です。

だからはじめに言い訳をしておきますと、通常の意味での哲学の講義を、私はできません。というのも、誰かと話をして、その人が言ったことについてはいろいろしゃべれるんですよ。その場でお互いに考えながら話をして、それは納得できる、それはちょっとよくわからない、それじゃあまた議論しようね、ということはよくやっているのですが、講義は「正しいこと」を話さなければいけませんよね。しかし、「正しい」ということを、私はよくわかっていないんですよ。数学においては証明をすることで、ああこれは大丈夫だとわかるんですけど、哲学って昔の人の言ったことでしょ？ だから本当のところ、昔の人が何を言ったのか、そこはわからないわけです。講じる先生によって、みんな言うこと違うから。しかもね、なんで僕が一生懸命ここでいろいろ考えているのに、なんで昔のおっさんの話を一生かけて、毎日毎日辞書を引いてさ、ああでもないこうでもないって調べなきゃいけないのか。ばかばかしいでしょ、そんなの確かめられないもの、なんで俺がそんなことしなくちゃいけないんだ。……という気持ちがありましてね、ちゃんとした勉強をしていないんですよ。

ということなので、四年生の方には申し訳ないのですが、科学哲学に関して通常の意味での「正しい」知識、便覧的知識、および調査の積み重ねで得られるような知識は、残念ですが、ここで話することができません。もっと立派な先生はいらっしゃいますから、そちらの講義を聴いてください。それに科学哲学の講義はたいていルーズでもぐり放題です。たとえば慶応大学の西脇さんとか首都大の岡本さんとかそちらのほうに行かれたほうがいいのかもかもしれません。

じゃあ、私がここでなにをやるかという、「なぜいまあなたは哲学ということをするの？」という問いかけを——やってみせるといのはおこがましいな——というのも僕も「哲学とは何か」ということをわかっていないからなのです。僕がそうだと思っていることを一緒に「こうかなあ？」と皆さんの顔を見ながら話しをするつもりでやってみたく思います。前もっての資料を用意するべきなのですが、そういうその場その場で湧いてく

る話題をしゃべるので、持ってきていません。僕がコンテナに知識をつめて皆さんのところにもって来るといふことはしません。皆さんの顔を見て、目を見て、こういうことに関心がありそうだな、というのを察してしゃべります。意外とこれが正確なんですよ。

● 「logos」 ≠ 「学」

「哲学」という名前なのですが、ご存知のとおり、英語の「philosophy」を西周が訳したものです。「学」とつく分野はほかになにかあるでしょうか。たとえば、「現象学 phenomenology」がありますね。

「logos」は「legein」という動詞から派生した語で、もともとの意味は「語る」です¹。古くからある学問には、「logos」がつくものとつかないものがあります。「logos」がつかないのは、たとえば「経済学 economy」です。エコノミーは、もともと「家政学 oikos」のことです。家政学っていっても、家庭科でやるような料理の作り方とかではありません。ギリシャの場合は家族が大きいから、いわゆる豪族や大名家のようなものなのです。ひとつの社会単位の運動として家政学が出てきたんです。「物理学 physics」、これは「ピュシス physis」。アリストテレスには『自然学』という著作がありますね。そして、これから向き合うことになる「科学 science」、これにも「logos」はついていません。

「哲学」も「経済学」も「科学」も、もともと「logos」という言葉を使ってはいないんですよ。でも、日本では「学」という語をつけたがるのね。学という偉そうな気がするでしょ。高校生よりも大学生、生徒よりも学生のほうが偉そうですね。「学」という字がつくことで、僕たちはどのようなイメージを持つことになるのでしょうか？ 考えたことがありますか？

「学ぶ」はもともと「まねぶ」、真似をするという意味なのですが、「logy」は話し言葉という意味です。だから、もう使っている言葉が違うのです。「哲学」というと偉そうでしょう。「ドイツ観念論のシェリングにおける誰その影響について」とかね。それに哲学というと西欧哲学が思い浮かぶでしょう。それからインド哲学、中国哲学が続けて思い浮かびます。でも、ラテンアメリカの哲学、カリブ海の哲学なんてびんと来ませんよね。なぜでしょう？

● 哲学的だと思われる問いかけについて

ヨーロッパ半島という狭いところ、日本の人口はいま一億三千万くらいでしょうが、EUの総人口は五億くらいです。その程度のところから発信された文化をああでもないこうでもない議論しているのです。この状況を、へんだなあ、と思ったことはありませんか？

私の友人、というには向こうのほうが少し偉いかもかもしれませんが、中島義道さんという

¹ 「ロゴス」と「レゲイン」についての関連はさまざまところで指摘されている。例えば、ハイデッガーは『ロゴス・モイラ・アレーティア』で詳細な考察を行っている。(収録『ハイデッガー選集〈33〉』参考 HP <http://www.h6.dion.ne.jp/~yukineko/logos.html>)

人がいます。彼はこのあいだ電気通信大学を定年で辞めまして、お金をもらいながら哲学塾をやっているんです。哲学をやりたい町のおじさんおばさんや若い人たちを集めてね。彼らは哲学の学位論文を仕上げるために中島さんの塾に通っているわけではなくて、「私はなぜここに存在しているのか」、「世界の意味というものはあるのか」ということを考えるために通っています。落語で「浮世根問」というのがありますよね、熊さんとはつつあんがご隠居のところに来て、世界の果てはどうなっていますかね、と聞くと、そこまでいくと落っこちるところですという。(笑) 古代から中世初期、2世紀から8世紀ごろまでの教父時代では、時間の問題に関してアウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354 - 430) がいろいろ複雑なことを考えています。そのとき、「神様は時間をつくるということをやったけれど、その前はどうかですか？」という質問する人がいたそうですが、その質問に対して彼はこう答えたそうです。そういうことを聞く人のために神は地獄を作った、と。(笑) あと、東京国立近代美術展で「ゴーギャン展」をやっていましたが、ゴーギャンの遺書代わりともされる絵の題名は『我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか』(1897)でしたね。

哲学的だといわれている問いかけは、べつにギリシャに特権的にあった問いかけではありません。それはいつどこで始まったというのではなくて、誰でもが問うることなんです。学校で教わって、雑誌で読んで、「哲学というものは西欧由来のものである」ということを学ばされてしまったのでしょうか。自分がいまここにいる、なぜここにいないかならなければならぬのか、ここにいていいのか、ということに対して、「単位を取るためにここにいるんだ」という答えもありではあるけれど、そんな答えじゃ満足しないよね。

では、どんなふうに問うことになるのでしょうか。

● 「時代の問い」

『哲学の歴史』のなかで、東北大の新田義弘(1929-)さんが序文にこういうことを書いています。

なによりも哲学の問いというのは、ひとりひとりの人間の内発的な問いであるとともに、時代が共有する課題、すなわち時代をしてその時代たらしめている時代の問いでもある。そういう問いのなかではじめて、時代は隠されたすがたは問うものに対しておのれを見せ始めるのである。²

カッコいい。たしかにそうだと納得する部分もある。けれどね、時代の課題ってなんだ？ 時代の問いって？ ある時代のただなかにいるみんなが問うのか？ 違うよね。でもそうかもしれない。正解かもしれない、わからない。つまり、まともに思えることはある、けれどまともに思えることでも、本気になって考えようとする自分が腹の底から納得できるかしかなくなってくる。

皆さんは長いこと勉強してきて、はい問題です、と出されてそれを解く、ということを

² 『哲学の歴史—哲学は何を問題にしてきたか』 新田義弘 講談社 (1989/12) p.10

ずっとやってきているわけだけれど、「答えを出すということが学ぶことだ」ということをずっと刷り込まれてきているわけでもあるんだよね。これは本当に怖い話なんですよ。僕がこんな言い方をできるようになったのは、ここ十年くらいのことです。普通に大学をちゃんとあがってくると、受験勉強なんてくだらないよね、と頭ではわかった気になっている。けれど、自分がどのように問題に対して態度をとるか、その行動と思考パターンを省みると、子供のころから刷り込まれている思考パターンというのは、知らず知らずに僕を構成し、命令し、導いているんですよ。

分析哲学の野本和幸³さんが都立大学に赴任してきたときにゼミに遊びにいったのですが、大学院修士一年の学生を対称にしたガイダンスで、彼がこんなことを言っていました。

「修士論文を書くということは学問の手習い・訓練というふうに考えるでしょう。最初なんだからオリジナルは誰も期待していない。だから、そういうものだと思うでしょう。でも、そのときに書いた修士論文は、これからのあなたの考えを縛るよ」と。そのとき修士の人たちはみんなぼかんとしていたのですが、周りにいたスタッフたち一同が、「うーん」と深く頷いたんですね。

自分が語ってしまったこと、ふるまったことは知らず知らずのうちに自分を形成していきます。デカルトは、哲学は自発性だと言いました。たしかにある角度から見ればそうです。でも、書いてしまったこと、話してしまったこと、考えてしまったことはどんどんあなたを作っていきます。

では、あなたを作っていくものとはなにか。

『哲学の起源』⁴でオルテガ・イ・ガセット (José Ortega Munilla 1856 - 1922) はこういうことを書いています。世代というものはただの人間の集合ではない。今言ったことを全部含めた生活様式、話す様式、理解する様式、そういったものをすべて含めて考える。しかもその世代はギリシャ時代、中世、現代というようなそんな単位じゃない。三十年で世代は違う。親と子で違う。親が物事を理解する様式を、子供は理解することができない。同じ時代というのは違う世代が人間として集まっていることではなく、生活様式がある意味で争い、ある意味で共存することである、と。なかなか含蓄の深いことを言っています。

ほかにもオルテガは「哲学とはなにか」⁵という論考を残しています。これは1933年に彼がマドリッドの映画館で講じたものです。オルテガはマドリッド大学の先生だったのですが、フランコ政権と兼ね合いが悪くなって大学で授業ができなくなり、一般の人を集めて十一回の講義をした。これはそのときの草稿です。

彼は時代というものを重要視していたし、彼自身が時代に縛られていることを自覚していた。スペインという国はご存知のとおり大航海時代には世界を制覇し、世界の銀の数十

³ 現在、創価大学文学部教授。分析哲学、言語哲学に造詣が深く、フレーゲ著作集を編集したほか、フレーゲに関する研究書の翻訳多数。

⁴ 一方は哲学書の序文で、もう一方は序文として書いたにもかかわらず長すぎて没になったのを編集者が遺稿して編集したもの。

⁵ 『オルテガ全集6巻』収録。

パーセントを輸入した。しかしやがて疲弊してきて、ナポレオンが攻めてきたときにはゲリラ戦でしのいだけけれど、ヨーロッパの文化中心から離れて、経済もだめになり、民衆はみんな食うや食わずの生活を送らざるを得なくなった。「神様はスペインにすべてを与えてくれた、ただひとつ、まともな政治を与えてくれなかった」。スペインの民衆は十九世紀の終わりまで、ロシアの農奴に近いような悲惨な生活を送っていたわけです。それでもイスラム教がいたところには文化的には最先端を走っていたわけです。過去の栄光を知っている。なのになぜいま、俺たちはこうなんだ？ フランスから来た王様が逃げ出してしまう、軍は暗躍する、政治の混乱は終わる気配を見せない。俺たちはどうやって生きていけばいいんだ？ そういう問いかけが常にオルテガのなかにもあるわけです。これが、さっき新田さんが書いていた「個々人の問いであると同時に時代の問いでもある」問いかけです。

では、いまここ日本にいる僕たちはどうしましょうか。

●日本の大学にはなぜ哲学科があるのか。

僕たちはヨーロッパ人ではありません。

一般的に言われている哲学はギリシャから来たという話をしたばかりですが、それだけではないということは当然ご存知のことと思います。もうひとつ、キリスト教の影響があります。

キリスト教はアラビア半島のほうに移り、それがもう中近東に移りました。キリスト教といえば、ローマ・カトリックとプロテスタントを知っていると思いますけれど、起源はエルサレムですよね。それに最初にできた五つの大きい教会のうち、ローマが一番西だった。エルサレムを筆頭として、あとはアレキサンドリア、アンティオキア、コンスタンティノーブル。もともと文化中心は中近東と東欧なんです。ローマ帝国は東西に分裂したときには民主制に近いところから皇帝制になり、大土地制になっていったときに皇帝を四人たてましたよね。正皇帝が二人、副皇帝が二人。一番とったのは東の正帝です。ビザンチンのほうが文化中心で、ローマは辺境だったんです。キリスト教のなかにも違いがありますし、アラブのほうに行って——アラブというのはもっと後にできた概念だからこういう言い方は正確ではないのですが——研究されて、イスラムという形で旧約聖書のつながりをもって、そこで研究されたものがもう一度ヨーロッパに入ってきて、融合して、大航海時代と近代を通過して、いまに至っているわけです。つまり、ものすごくいろいろな要素が入っているわけです。

さきほどお話したとおり、「私はどうして生きているのか」「世界はどうしてあるのか」「なぜ私はあの人が好きなのか」——愛に関してはとても重要なテーマですよ。けれど、それだけで哲学の問いとなるのか。なにを問いたいのかということは普遍的かもしれない。でも、どのように問うか、どのように問いにするかというやり方は、哲学はきわめて特殊な問い方をしているわけなのです。

哲学はとても根本的な事柄を論ずる、基礎学である。それは問おうとしているものがす

ごく根本的だからと思えるかもしれないけれど、根本的なことだったら、そもそも哲学で問わなくてもいいんだよ。ちょっとひどい例ですが、すごく悩んでしまった結果、自殺してしまった人がいるとする。しかしその自殺はその人の命をかけた回答かもしれないじゃない。問い方としては間違っているかもしれないけどね。その回答に対して、どうして哲学の問い方が特権的だということができるのでしょうか。

つまり、哲学ということで漠然となにかやっている気になっていることに、苛立ちを持ってほしい。日本の哲学者というのはみんな良い人たちで、学会の発表ではなくてお酒を飲んでこういう話をすると、みんな素直にこういうことに関心をもっているわけですよ。

でも、さっき言ったように「哲学」でしょ。ここに来ている人たち全員が大学のポストをもらえるわけじゃないけれど。社会的な要求のセレクションによって「哲学」という枠があってそこで給料をもらえるかぎりは「哲学やっています」という顔をして仕事をするしかないじゃない。「哲学」の問い方が天職であるという人はそれでいいけれど。ヨーロッパの人たちは幼いころから哲学というものの土壌に知らず知らずのうちに親しんできているわけですよ。教会でお説教を聴いたりとかしてね。キリスト教と哲学の交錯はほんとうに複雑で、哲学対宗教、という単純な図式ではまったくない。お互いに貶しあいながらその貶す方法によって大きくなってきた。

カトリックには聖体拝領というのがありますね。キリストが最後の晩餐で「このパンは私の肉である、これを食べなさい。このワインは私の赤い血である、これはあなた方と罪の許しのために私が交わす契約の血である、これを飲みなさい」。そして「この中に裏切り者がいる」と言って使徒たちが「うわあ！」となっているのが有名なダヴィンチの絵ですね。その聖体拝領と、旧約聖書の一部、新約聖書の一部の朗読をする。その合間にミサ曲を賛美歌として歌う。そしてその後、説教というのが入る。本来はこれを毎日やるんですよ。そういうような暮らしをずーっとカトリックの修道院では繰り返してきたわけですよ、何百年も伝統的に。

また、フランスでは非常に知的なものを重んじる風土がありますね。日本で言うと高校、大学予備門にあたるような学校にリセというのがあります、その最後にバカロレアという試験があります。バカロレアの第一に重要な科目は哲学の論文です。大学に入る前の子に、六時間、論文を書き続けさせる。全国でもっとも優秀な論文は、フランスでもっとも有名な新聞のル・モンドに全文が載ります。そのバカロレアを通ると、あと大学は無試験です。ただし例外がありまして、パリ政治学院（エコール・ド・ポリテク）、ナポレオンの時代に作られた大学校（エコール）は、技術的なものを極めるための能力開発的な側面があるので、もっともむずかしい試験があります。フランスの総理大臣はほとんどパリ政治学院の卒業生です。彼らは同時に、哲学者でもある。

彼らは哲学というものが染み付いている。

そうではないところで、日本は大学で哲学科を有しているわけです。なんででしょう。中身云々の話ではなくて、どうして哲学科がいま日本の大学にあるのでしょうか。

●ヨーロッパ的、日本的<1>

僕はもうあまり外国には行きませんが、君たちは行くかもしれないね。そのとき、外国人と話をしたときに「どうして日本には哲学科があるの」と聞かれたときにどういうふうに答えますか。

よく昔からあるのは、日本は無宗教の国だと言うと、向こうは驚くわけです。「お前ら人間じゃないんじゃないか?」。なぜならいま言ったように、考えることの基礎として宗教というものを考えているからです。宗教というのは、葬式仏教みたいに死んだときだけ担ぎ出されるものではないし、古代そうであったように戦争に行きつために生贄を捧げるとか、そういう神秘的なものだけではない。宗教という概念はものすごく広い。それがまったくないというのを向こうの人が聞いたら、「彼らは人間ではない」と思うのも無理はないんです。

ヨーロッパは植民地で悪行の限りを尽くしてきたわけですが、それは彼らが現地人を人間だと見なしていなかったからです。アフリカの奴隷をアメリカに運ぶにあたってのロジックはすごいよ。アメリカでインディアンが酷使と病気のためにばたばたと死んで、労働力が減ってしまった。どうしよう、困った。しかし伝え聞くとアフリカのほうではサルに近い奴らがいるらしい、それなら文化的な新大陸で飼ってやれば、彼らにとっても極めて幸せだろう、と。そういうことを真面目に考えていたんですよ。そういう背景を考えないでこちらのイメージだけで「日本は無宗教の国です」と言えば、理解してもらえないのは当たり前ですよ。そんな私たちは、哲学というものをどのように知っているのでしょうか。

新田さんは七十歳近くになるおじいちゃんですが、彼はすごく優秀な人で、一生懸命文献を調べて論文を書いています。ヨーロッパに行き、それはすごい、これこれを教えてください、となると、ならないよね、いまのところ。

日本は科学技術においては、科学技術においては世界のトップを走っている分野がたしかにあります。また、聖書講読学という聖書をテキストとして科学的な方法を用いて分析する分野があります。人文系で最初にコンピュータが導入された分野の一つですが、そこでは日本人はものすごく業績をあげています。ところが、いま言ったようにファンダメンタルな部分に関して意見を言う哲学的な営為に関して、日本人はなにを期待されるか。「科学技術について語ってください」とは、まず言われぬ。そうではなく、例えば西田幾太郎と現象学の関係性を教えてください、西田独自の思想はあるのでしょうか、とかです。西欧には自分たちとは違う血を入れることによってどれだけ自分たちの哲学が伸びていくか、という歴史があるんですよ。それに残り残された地域もいっぱいあった。

さっき言ったように、カリブ海の人たちは、二十世紀の初めごろに俺たちはいったいなにもものなんだ、ということをして散文や詩を使って考え始めた。それがエスニックと呼ばれる

思想展開⁶です。日本においてそれができているのでしょうか。日本的ということはどういうことなのか。清少納言が曙光を讃えることなのか、紫式部が世界初の長編ロマン小説を書いたことなのか。仏教は日本的なのか。そもそも「日本的」と言ったとき、それは誰の日本なのか。

われわれ個人の問いというものと、われわれの世代の問いと、われわれの世代を超えた日本という単位の問いはすべて違うものです。あなたはどれに対してそれを問うのでしょうか。日本的なこと、日本的な哲学というのは一時期、流行りました。でも、自分の問いとして、根っことして、ルーツとしてそれがどうなっているのか。

●ヨーロッパ的、日本的<2>

哲学のもっともベーシックといえる部分がヨーロッパ人には染み込んでいます。

ロゴスはロジックになりますが、ロジックは真理とかそういう概念と結びついています。また、知識という語に関して言えば、「間違った知識」は存在しない。「君の知識は間違っているよ」と日本では言いますが、ヨーロッパ人から見ると、それはおかしい。知識(knowledge)は常に、絶対に正しいからです。分析哲学や言葉の哲学では「間違った知識」を「信念(belief)」と言っていますがこれはいわゆる「臆見・ドクサ(doxa)」です。これに対して「知識」は「エピステーメ(episteme)」と呼ばれます。後期プラトンではこの二つが対比されています。

「存在というものは絶対にある」とするかつちりした考え方と、仏教的な文化の一つの典型として禅、そのなかの縁起という思想がありますね。インドにおいて縁起の思想というのはなかなか複雑なものがあるようなのですが、その部派のなかに説一切有部というのがありまして、「法則は実在する」と主張する人たちもいます。それに対するのが、私たちにお馴染みの大乘仏教です。竜樹菩薩(Nāgārjuna ナーガールジュナ 150 - 250 頃)、が空を説いて、それが「空即是色、色即是空」というフレーズとして日本に入ってきて、私たちは、「空即是色、色即是空？ うんうん、そういうのはあるよね」と思うわけです。それらは私たちのなかに染み込んでいる。

●「業(ごう)」を授ける

昔のものを材料として、判断のための足掛かりとしてとらえるのはとても大事です。何も無いところを登っていくのはつらいものね。でも、自分の問いとしてあるか。人から受け取って、人に向けて出すだけということになってしまいがちではないか。

皆さんに貢献するという形で、「正しい知識」を与えていく、これはひとつの訓練としての授業のあり方だと思う。でも、最初に言ったとおり、僕はそういうことができない。ですから、「なんでこんなことを考えなきゃいけないの？」ということをお願いしたいと思います。

⁶ メキシコとカリブ海とブラジルを結ぶ範囲のクレオール文化。

これは落語みたいな話ですが、なぜ授業という言い方をするのでしょうか？ 大学では講義と言いますが、講義は「義を講ずる」だよね。仁義礼智信のなかのひとつを講ずるといって、非常に格調高いものである。授業は、「業(わざ)をさずける」。さっき言ったように「正しい知識」を含めた技術を授ける。でも、僕がここでは授業の「業」を「わざ」ではなく、「どうしてこんなことを考えてしまうのだろうか？」という「ごう(カルマ)」を授けることとします。中島義道さんは哲学病ということを行っていますね。「そんなことを考えなくてもいいのに、どうして存在の意味などを考えてしまうのだろうか？」と。そんなことよりどこそこのバイトが時給がいいとか考えているほうがよっぽど楽しいのに、問いから離れられない。業(ごう)ですよ。

だから、この授業は、業を授ける時間です。すでに業を持っている人はしょうがない、一緒に苦しみましょう。業を授けられるのがいやな人は、あまり聞かないほうがいいかもしれない。とりあえず、これが私のやりたいことの前置きです。

●なぜ科学ということをシラバスに書いたか

哲学はどう問うか、ということを考えてきた。問いたいことはみんなあるんですよ。人生の意味、死について、愛について。でも、同じような意味で「科学」というのは問いたい問いになるのでしょうか。

僕は問いたいです。

例えば、死というのは僕にとってもものすごい大事な、必ず来るらしい——どうも死ぬ気はしないんだけどね、もしかしたら死なないんじゃないかと思っているんだけど——ことである。このまえ、車を運転していたら突然人が飛びだしてきて、ブレーキを踏んでハンドルを切って、壁にぶつかる！ と思ったときは、死ぬ事を考えました。そういうとき、「死とはなんだろう」と問いたくなるよね。

しかし、科学というのはそういうふうに通いたい問いでしょうか。多くの人は言います。現代は科学のただなかに生きている、携帯を持っていない人はほとんどいないし、メールを使ったりパソコンを使って検索しない人もいない。GPSなんて軍事設備を最近では徘徊老人や子どもの誘拐防止のために使っている。飯を食うにも、自然農法がクローズアップされるほど食品添加物だ農薬だと騒がれている、けれど、それらは入れないと流通システムが成り立たない。科学は、愛とか、死とか、人生や世界の意味とかよりも、ある意味でものすごく陰險な問題のあり方なんですよ。

愛とか死は、まるで私たちの前にあるかのように語られますよね。「愛ってなんだ」といったときに、愛という一塊りのものがあるかのように語りますよね。死も、ペットの死とかお祖父さんの死とか、憎かった奴の死とか自分の死とかあるけれど、一塊りの死というものがあるかのようにして語りますよね。人生の意味も、世界の意味も同様です。

これは脱線だけれど、カルヴァン(Jean Calvin, 1509-1564)が「召命」という概念を語

っていますね。これは人生の意味を、まさにものとして捉えた概念です。

キリスト教は本当に面白くて、神学には三つのパターンがある⁷。神様の性格を分析するときに、

- ① 存在論的神学：スコラ哲学に代表されるような、ある意味で合理的な、神が世界をいかに作ったかという構造的な視点をもつ。このパターンにおいて、神はある意味で構造です。世界を創造に対して理法を考えようとなりました。
- ② 意志論的神学：神が世界をどのように創造したか、に焦点をしぼります。代表はデカルト（René Descartes, 1596 - 1650）です。
- ③ 聖霊論的神学：父＝神と子＝キリストとをつなぐ、媒介項としての聖霊に注目します。

ルネサンスで初めてギリシャの復興が行われたわけではありません。十一、十二世紀に、すでにオリエントからの写本が絶え、アラビア・イスラム系の研究・解釈を施されたブラトニズム、ヘレニズムの思想がちゃんと戻ってきて、それに入門するかたちでギリシャ思想をとりこんだ。だから、ギリシャのイデア論やアリストテレスの形而上学が、①存在論的神学のなかには組み込まれています。それに対して、デカルトは②擬人化された神の意志を論ずる。ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646 - 1716）はデカルトに反対します。「神が悪意をもっていたらどうするんだ？」。デカルトは答えます。「神は完全だから悪意を持たない」。どちらが正しいのでしょうか。（笑）②意志論的神学は、その後イギリスでピューリタリズムとして発展しました。それらの中間に③聖霊論的神学があって、これはインドから伝わってきている「ブネウマ(呼吸)」やヨガとも関連して、世界の理法と創造の意志とをつなぐものとして論じられているわけです。

カルヴァンは①存在論的神学です。この神という構造が対応しているのが、カトリックのヒエラルキーであると。ゴシックの大伽藍は神の構造を背景としていた。しかしいろいろ頽廃もおこったわけですね。免罪符を売ったのは、教皇領で政治に狂奔するは、陰謀は渦巻くは、坊主が結婚しちゃいけないのにボルジア家では法王その人が結婚しちゃうとか。そこでまじめだったルター（Martin Luther, 1483-1546）が聖書との対話ということを持ち出してきて、宗教改革を起こしたのでしたね。

話を「召命」にもどしましょう。人生の意味、と言ったときに、キリスト教では実体的に義務感や責任感を発動させるものとして受けとめられるわけですね。近代のヨーロッパの経済的な側面を支えた義務感を支えるものひとつであり、そして哲学のなかで非常に問いやすい。

それに対して、科学はどういう問いになるのでしょうか。

いまはみんな科学科学、つとと言うじゃない。インフルエンザのワクチンの安全性だって、DNA鑑定の実証性だって科学的検証がキーになっていますね。では科学ってなに？ そ

⁷ 『科学思想の系譜学』大林信治,森田敏照 ミネルヴァ書房 (1994)

れを指すことはできますか？ あたかも指せるかのように語ってはいませんか？ 科学といわれるようなものが「科学」と名づけられているのでしょうか？ それとも「科学」という名前があるだけで、そこから科学があるように思われているだけなののでしょうか？

——このような問いかけは、じつは哲学のほうに帰ってきます。

● 普遍論争

われわれはとにかく言葉を使って問うしかない。さっき言ったように *logos* は語る言葉です。ヨーロッパ人は、知性は言葉だと思っています。しかもキリスト教において創世記では最初に水の上に霊がただよいて云々というあとに「光あれ」が来ます。⁸しかし「ヨハネの福音書」では、天地創造はこのように始まります。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」つまり、*logos* は神までいくんですよ。これは後期プラトンとも関係があるんだけどね。

でも、われわれは言葉を日常に使用するときにはそういうことは考えない。

これはチョークだよ。これにチョークという名前を与えるよね。……と思って使っているよね。生きてことばを使っていくうえではそれで十分だよ。でも、哲学で言葉を使うときにはそういうふうに言葉をつかっているのだろうか、根本的に。言語哲学とか分析哲学という伝統は昔からあったんです。中世の普遍論争と呼ばれている話。

普遍論争というのはアイデア論から来ているんだけど、神様とお話ししようとしたとき、抽象的な普遍というものがいかなるものとしてあるのか。普遍は名前でしか呼べない。アリストテレスが普遍は述語だといっています。じゃあ、普遍が述語ということは、普遍とは言葉にすぎないのか、それに対応するもの、本体、存在がないとおかしいじゃないか、と考えた。では、それはどのように「ある」んだ。というのが普遍論争のはじまりです。

後者の立場をとるのが実在論。これはリアリズムという言葉のひとつのベースとなっていて、普遍というものは、普遍というものとしてあるんだという立場。これがアンセルムスとか正統的な信仰とつながっています。これに対して、対抗馬となったのが、唯名論(ノミナリズム)。それは言葉なんだ、言葉として普遍であり、存在は個物である。じつはアリストテレス (*Ἀριστοτέλης*、前 384 - 前 322) がある部分これに近いところを考えているんですね。つまり、ウーシアの問題。アリストテレスは個体がベースですから。これは後で話します。

で、この両方の中間として、概念論というのがあることになっているんだけど。唯名論というのは音声的だったのね。音としての言葉だね。昔はこの概念論はそうでなく、言葉は概念としてあるんだといった。この概念論を唱えた人が、ペトルス・アベラルドゥス、フランス語での読み方はピエール・アベラル (Pierre Abélard, 1079 - 1142) です。『アベラルとエロイズ』を読んだことがある人はいるんじゃないでしょうか。アベラル

⁸ 「はじめに神は天と地を創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。神は「光あれ」と言われた。すると光があった。」

というのは中世フランスの修道士で、当時できたばかりの大学の先生でもありました。非常に学識が高い人だった。彼は二十歳ぐらい若い女学生、エロイーズと出会います。ものすごく優秀だったエロイーズとアベラールは学識を語り合いながら愛を高めてしまった、彼女からアプローチして、秘密に結婚をしてしまった。そしたらそれが彼女の親族にばれたのです。彼は縁者にとっ捕まって、局部を切断されてしまった。それでサン・ドニ修道院にこもり、著述に専念した。という話があります。アベラールは、概念は言葉だと思っていたのです。ですから、いまこの概念論というのは、唯名論のほうとして立てられた。つまり、この時代からこの話はあったんですよ。べつに二十世紀になっての議論ではない。ただし道具立ては揃いました。フレーゲ (Gottlob Frege, 1848 - 1925) が \forall (任意の) や \exists (存在する) のような量化を十九世紀の末に考案したりとか。このような道具があって、ロゴスというのが、いわゆる日常で語ることばではなく形式言語というタイプの言葉であり、では言葉ってなんだろうと改めて問われたときに、二十世紀のはじめに中部ヨーロッパから起こったロシア・フォルマリズムという芸術運動、チェコの構造主義言語学や言語論的転回が起こった。けれど、名前とは何か、という問いは昔からあったんですよ。道具立てが増えていただけなんです。

つまり、問いたい問いというのはあんまり変わっていないかもしれない。いまのはひとつの例ですが、いま哲学が「なにかある」と思っていたそれは「名前」なのか、それとも「もの」なのか。そういうのはずっとあったわけです。思考の技術は変わりました。中世の人たちが持っていた技術は、三段論法とアリストテレスの形而上学くらいしかなかった。けれど、構造主義言語学というのは、音韻論とか、各国語の語尾変化とか、音のあいだがどのようにになっているか、ものすごい精緻なことを調べたわけですよ。そして祖形としての言語というのはどのようにになっているかという知見をもたらした。そういう思考の技術の変遷を通じて、「どう問うか」というのは変わってきたわけですよ。

そうしたときに「科学」というのはどういうことなのでしょう。

●哲学から科学へ

「科学」というのはある意味で技術の体系だよ。つまり、いまメタな問いの問題になっているけれど、そのメタにするものそのものが問いになっているわけですよ。そうすると、「科学というものがあって…」という問い方でいいのかな。

もちろん、科学的だと思われるものはいっぱいある。とくに科学に対しての科学哲学というものが、二十世紀に起こったわけですよ。そこで科学哲学のひとつの大きな柱が、京大の伊勢田さんが書いている科学と疑似科学の境目というものについての規定。言い換えれば、科学という述語をいかに正しく使うかという問いです。でも、それは科学という述語をどう規定するかという言葉だとしたら。述語はだれがどう作るの、ということになるでしょう。述語が当てはまるべき範例があって作られたのではないとしたら。どうやってその述語を作ったのか、ということは誰も問うていないわけ。ここにあるのは科学だ

よね」というのをベースにしているでしょ。もはや世界にばらまかれているもの。われわれに否が応でも迫ってくるものを、名づけてしまうことができるというふうに考えて、哲学の問いの相手として立てられそうだとおもっているからこそ、「科学」というものを考えているのではないのでしょうか。それでいいんだろうか。それで、科学がどうして哲学になるのか、という問題と、じつは科学というのがもともとはピュシス、フィジックス、自然哲学からきているということ。ニュートンに関しては、フィジックスとは自然哲学だと訳すべきだという人たちがいます。つまり、成立の過程においては科学自体が哲学だったんですよ。

ルネサンス期の三大発明、羅針盤、火薬、印刷術というのは中国からやってきたものですよ。中国には戦国時代から指南車というのがありますからね。火薬に関しては、唐代には黒色火薬が発明されていた可能性がありますし、元寇のときに炸裂弾みたいなのをぶっ放しているのが元寇絵巻に描いてあります。つまり、中国にはものすごく進んだ技術があった。しかし、それは科学とは呼ばれない。なんででしょう。そうだとすれば、科学が哲学思想と絡み合っただけで成立してきたということと、いま科学が哲学の問題の対象、哲学で問いたいものになるということの関係があるにちがいない。それはどうなっているんだろう。昔は思想のなかから世界に対してある現象というところに着目していた。それは大きい哲学体系のある一部だったんだよね。それを精緻化することによって観念を組み合わせることにより、科学というものが現れてきた。

科学は *science* ですよ。これはもともとスキエンティア *Scientia*、知るです。でも、ラテン語で知る、というのはもうひとつ言い方があるんです。*Sapientia*。われわれのことをホモ・サピエンスと呼びますね。あるいはホモ・ルーデンスとか、ホモ・エレクトゥスとか。そのサピエンスとは、あえて訳すと「知」ではなく「智」です。あまり正確な対比ではないんですけど、英語では「clever」「wise」が当てはまります。*Clever* は技術的に優れている、賢い、小ざかしい。*Wise* とは神なんです。ビートルズは「*Wisper word of wisdom*」と歌います。だから、この場合のスキエンティアは神ではないです。でも、だから体系の一部として、神というものと関係するものとして考えている。だから、ニュートンとかデカルトたちはキリスト教をまったく捨てていない。宗教といってもいろいろな次元があるんですよ。政治的な次元。宗教のセクトの次元。それから教義の次元。ニュートンは神の存在証明をしたかった、だから、宇宙は神の器官だという言い方をしますね。また、1930年代にはクルト・ゲーデルも、不完全性原則—「ある体系が正しいということを、その体系のなかでは証明することはできない」⁹をもってして、神とこの原則の関係を考えたんですよ。

⁹ 1931年、発表。正確な定理は以下の通り。

- ・第1不完全性定理：自然数論を含む帰納的に記述できる公理系が、 ω 無矛盾であれば、証明も反証もできない命題が存在する。
- ・第2不完全性定理：自然数論を含む帰納的に記述できる公理系が、無矛盾であれば、自身の無矛盾性を証明できない。

つまり、科学というものが作られていく過程では、思想というものがそれを支えていたわけです。けれどもいまはニュートンの法則じゃないけれど、反作用のような形で、科学がわれわれのほうに侵食しているという状況がある。技術が侵食してくるとは誰も言わない。技術が侵食してくるといことは、いままでもたびたびあったわけです。中国においては砂漠化現象が開墾から生じたということをジョセフ・ニードが書いています。つまり、技術からのしっぺ返しは昔からあったわけです。けれど、いまのわれわれはそれを科学という。どう違うのか。あんまりそういうふうには考えないでしょう。

●科学から哲学へ

科学に対して哲学が答えを与えたい、という意味で今回の授業のシラバスを書いたわけではないんですよ。私が知識を与えられないから、ものを考えたい、哲学でといたいというときに、非常に面白い人たちで、考えようとするということについて強制する形として「科学」というものを考えたい。村上陽一郎さんは「科学はモザイクのようなものだ」と書いていますが、これはまともな話なんですよ。それを外から眺めて「モザイクのようだ」というのは、現象記述としてはいいかもしれない。けれど、記述している現象が科学といわれることは、どういうことなのか。そういうことを、僕は哲学として知りたい。これはギリシャ的な伝統なのかもしれないけれど、哲学はことの本質を知る、ただ記述するだけではなく、本質を知る。科学といわれる本質はなにか。この本質も、なにかあるものがあるって、と想定して本質とっていいのか。つまり、実在論や観念論、という話の以前に、ここにチョークがあります、けれどチョークがあるのはパトナム (Hilary Putnam, 1926 -) の言うところの「桶の中の脳」¹⁰のしている夢のなかかもしれない。でも、日常にそんな問いを立てる人はいない。哲学はそれをやる。業(ごう)としてそういう問いを立ててしまう。どうやってその業をまっとうするか。ということを考える上で、科学というものは非常によろしいものがあるのだということです。逆にそれが西洋の伝統のなかにたくさん入っていた基礎的な概念、「真理」「実体」「普遍」というものをコントラストしてすこしだけ覗かせてくれるかもしれない。だから、僕らにとってまともではない、というのはちょっと言い過ぎですが、僕らの体に染み込んでいないような哲学に対してあえて穿った問いを立てる材料として、科学というものを出しました。

という方向で話をしたいのですが、どうなることでしょうかね。(笑)

¹⁰ Brain in a vat(水槽のなかの脳)。「あなたが体験しているこの世界は、実は水槽に浮かんだ脳が見ているバーチャルリアリティなのではないか」という仮説。まったく一緒ではないけれど、同じような話が映画で『マトリックス』になりました。